

六 歳でボケる人、 八 歳でボケない人

牧師 水草修治

お正月に古本屋をぶらりとしていたら、目に止まったのが『六 歳でボケる人、八 歳でボケない人』という本だった。湘南長寿園病院の院長の松川氏が書いた本である。なんといっても、惹きつけられたのはその題名。たしかに、六 歳でボケている人もあれば八 歳でかくしゃくとした人もいる、考えれば不思議なことではないか。

もうひとつ惹きつけられた訳は、今年年齢が半世紀を数えようとしている筆者自身、このごろ家内と「あの人がね」「えっ誰？ああ、あの人ね」「そうそう、あの人が・・・。」というような会話が多くなってきたということがある。筆者は物の置き忘れは生まれつきで、物探しの上手な家内を与えてくださったことを結婚以来、神様に感謝しているのだが、人の名前を忘れるというのは、夫婦そろって最近の傾向である。

紙面がかぎられているので、ごく一部引用しよう。ボケやすい職業とボケにくい職業というのがあった。ボケやすい職業とは、判で押したような単調な毎日を送っている公務員、毎年同じような内容の科目を教えている教師や大学教授、頑固で堅物の職人、防御型のサラリーマン、楽しんでいない専業主婦だそうである。ボケにくい職業は手と頭を運動させている芸術家、創造的な編集者、ジャーナリスト、俳優、常に新しい知識を必要とする教師や大学教授、開業している医者、攻撃的部署のサラリーマン、前向きでものごとにあまりこだわらない主婦・・・ということである。

こうして見ると、職種もさることながら、どうやら心構えや生活ぶりがボケる、ボケないに大きく作用しているらしいことに気づく。つまり、決まったことを決まったように工夫することなく楽しまずつまらなそうにこなしていくという生き方をしている人は、ボケてしまうが、どんなことでも創意工夫をしながら、前向きに楽しみながら行なっていくという生き方を選んでいる人はボケにくいということであろう。

「あの頃は良かったが・・・」と後ろ向きに今について不平不満ばかりで、人を会うことを好まずにいると、ボケやすい。逆に、当たり前のことのようだが、人生をどこまでも前向きに生き、新しいことに挑戦する心の姿勢を持っているならばボケにくいということ

である。

練馬の教会にいたころ、九十近いSさんという英語学の元大学教授が教会にいらした。「老いの日々にあっては、毎日が新しい発見なので、楽しみです。老化というのは、今まで自分が経験したことがないのでから。」とおっしゃっていた。今、Sさんはすでに天国にいらっしゃる。イエスを信じて死の向こうにも行くべき輝かしい場所を持っていらしたから、Sさんの人生は死の瞬間まで前向きだった。

「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。」ピリピ書3章

海尻で家庭集会

一月十日(木)午後七時半、井出博彦さん宅で。 96 2534

南相木でも家庭集会

一月二四日(木)午後一時半から
日向の中島悦子さん宅です。どなたもどうぞ。 78 2047

新しい人生

「キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」第二コリント五章十七節

もし人生がやり直せるものなら、新しい人生を始めたい。そのような願いを持つ人は、少なくないと思う。新年を迎えると、私たちは旧年なすべきことをせず、なすべきでない

ことをしてしまったことを反省しながら、多かれ少なかれ、そのような思いを抱くものはなかろうか。十二月三十一日と一月一日とは、時間的にはほんの少ししか変わらないのに、元日の朝にはすべてが新しくなったような気分がするから不思議だ。

けれども思い返せば、去年の正月も、一昨年正月も、同じような気分でスタートしたはずなのに、同じ過ちを繰り返してしまったなあということも多いのではないか。

人間、自分の力で自分を変えようとしても変われるものではないのだ。バスケットで一生懸命練習すればゴール率は上がるだろうし、勉強して学力を伸ばすとか、畑を一枚ふやして生産量をふやすなどという変化は自力で作りに出せるかもしれない。けれども、悪い習慣・罪ある本性から自分を救い出すことは私たちにはできない。自分の健康を悪くし、家族にとっても害となっているとわかっていて、やめるべきだと思いつつも、どうしてもやめることが出来ない悪癖というものがあるあなたにはないだろうか。

「クシュ人がその皮膚を、ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたも、善を行なうことができるだろう。」(エレミヤ十三:二三)と聖書がいうとおりではないだろうか。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分の憎むことを行なっているからです。」(ローマ七:十五)と聖書がいうとおりではないだろうか。

私たちが自分で自分を変えることができないとしても、ひとつだけ可能性が開かれている。それは、私たちを造ってくださった創造主に自分の人生をおゆだねすることである。創造主は、罪に打ちひしがれている私たちをあわれんで、御子イエスを地上に遣わし、十字架によって私たちとご自身を和解に導いてくださった。だれでもイエスを神の御子、救い主として信じて受け入れるならば、その人は創造主なる神とともに生きる新しい人生を始めることができる。

今年、聖書を読み始め、御子イエスの名によって創造主に向かって祈る生活を始めませんか。新しい人生に生きる道がここにあります。

成人に、そして親に

ある人が自分の子ども時代のことについて、こんなことを書いていた。「小学生のころ私は『成人映画』というのは、大人しか見られない映画だということだから、きっととてもむずかしい映画なのだと思いますが、後に事実を知って、なんだか拍子抜けがして、がっかりしたものです。」笑えない笑い話。

今年も成人式が全国あちらこちらでもようされるのだが、成人のしるしが酒・タバコ・エロ映画解禁というだけでは、情けない。大人になるとは本来、どういうことを意味して

いるのだろう。

子どもというのは、親に愛され、先生に愛され、親や先生の保護下・監督下に置かれている状態を意味している。それは、子どもには自分では色々な生活の面において適切な判断ができるだけの力がまだ欠けているとみなされているからである。成人するというのは、親や教師などの保護監督を離れて、自分でもろもろの場面で適切な判断や選択ができるようになることにほかならない。自分と隣人にとって益となり、神の栄光をあらわすことになることを選ぶことができるようになるというのが大人になるということなのである。自分のことは、自分でできるのが成人である。

また「子を持って知る親の恩」というが、親の恩を知ることも成人のしるしであり、成熟のしるしである。中学生や高校生は、しばしば親に対して批判的である。それは精神的自立の始まりのしるしとして、ある程度やむをえない。十代のころは親のあらは見えても自分の欠陥にまで目が行かないからである。けれども、ときどき三十歳にも四十歳にもなっても、なお親に対してただただ批判的で親の恩に感謝できない人がいる。知能は発達しても、その心はまだ中学生くらいの状態に止まっている。

大人からさらに「親」になるとはどういうことか。それは子どもを産むことではない。親になるとは、まず自分のことが自分でできるということを前提として、子どもの世話もしてやれるようになるということである。自分のほしい物をがまんして、子どものために何かしてやれることを心からの喜びとすることができるようになったら、その人は親である。

その伝からいうならば、自分のことは犠牲にしても、隣人のために益を図ることをわが喜びとする人は、仮りに子どもがいなくても「親」として成熟した人である。幸い、筆者夫婦は、そういうクリスチャンの先輩たちを存じ上げている。これまで、どれほど、そうした方たちのご愛に支えられてきたことだろう。

このように考えてくると、大人になり、さらに「親」になるというのは生涯の課題なのである。自らを振り返れば、半世紀も生きていながら、まだまだ成長・成熟途上なのだとなんと成人式をまえにしてしきりに反省する次第。

「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』次にはこれです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この二つより大事な命令はほかにありません。」マルコ十二章三十・三十一節